

糸満市上米次腹門中の墓とジョーアキー（墓開き）儀礼について

大湾ゆかり¹⁾

About the tomb of Uigumuchibara-monchu's at Itoman-city;
the structures and ceremonies for removing one's remains to their permanent tomb.

Yukari OWAN¹⁾

はじめに

沖縄の葬墓制文化の中で、日本本土と大きく違うもののひとつに「墓」がある。沖縄で生まれ育った者であれば、巨大な亀甲墓や破風墓も見慣れた風景として目に映ることであろう。十六日や清明祭などの墓参りで親戚一同集まり先祖供養のため墓前で重箱を広げることも、極一般的な行事である。けれども、初めて沖縄を訪れる人の目には、沖縄の墓や墓前で懇親する光景は、大変珍しく映るようである。

ところが、そうした沖縄ならではの慣習も、実際には地域によってさまざまであることに筆者自らも驚かされた。それは、平成27年度に実施した企画展「琉球弧の葬墓制」のため沖縄各地を訪れ、それぞれの地域の墓の撮影や葬墓制の儀礼等に関する聞き取り調査を行ったときのことである。この調査で筆者は、自分が当たり前に思っていたしきたりとは違う、その地域独特のしきたりの存在に気づかされた。

中でも糸満市字糸満における墓と墓に関する行事には、他の地域には見られない独特の慣行がある。

まず、この地域の墓は、幸地腹・赤比儀腹門中の墓などに代表されるように巨大な建造物が多く、血筋を一にする巨大な集団によって維持されている。一つの墓を共有する集団の成員数は、幸地腹・赤比儀腹門中の墓では4千名以上にもなるという。糸満の門中は、長男、次男、三男・・・等の区別はなく、血のつながりがある父系親族全体で組織される。長男以外が分家する首里・那覇系の門中とは明らかに異なり、門中を構成する人口は膨大なのである。

特徴の2つ目には、幸地腹・赤比儀腹門中や上米次腹門中の墓は、シルヒラシという第一次葬で使用する墓とトーシー墓という第二次葬で使用する墓が別々にあることである。両門中とも、墓を共有する成員数が多いため、風葬していた時代にはシルヒラシ（遺体を安置しておく葬所）が不足し、それ専用の墓が設けられているのである。

特徴の3つ目には、子孫の多い門中では、シルヒラシ墓¹⁾からトーシー墓²⁾へ遺骨を納骨する移葬儀礼が、年に1度だけ日にちを決めて行われることである。第二次葬の墓、すなわちトーシー墓を開ける行事を「ジョーアキー」と称し、現在40ほどある糸満の門中のうち、約半数の21門中がこの行事を行っている[金城・宮城2019]³⁾。

2014（平成26）年10月、筆者は、糸満市教育委員会の協力でこの行事を調査する機会を得て、糸満市字糸満の門中組織の一つである「上米次腹門中」のジョーアキーを見学した。翌2015年には同門中の墓室内の調査に同行し、2019年にも補足的な調査を行った。本稿では、それらの記録をもとに上米次腹門中のジョーアキー儀礼を紹介し、また同門中が現在使用している墓室の内部構造について簡易図面を作成し報告することにする。

1 先行研究及び関連資料

糸満市字糸満のジョーアキーに関連する研究や報告には、次のようなものがある。

国立歴史民俗博物館が製作した『沖縄・糸満の門中行事-門開きと神年頭-』（1995）は、幸地腹・赤

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

比儀腹門中の年中行事を取り上げた映像で、門中組織のことやジョーアキー、神年頭等の行事を紹介している。『糸満市史』では『民俗編』と『資料編13 村落資料-旧糸満町編-』の「糸満の腹・門中」や「墓制」の項で門中や墓、ジョーアキー等の行事について詳しい記述がある。また、国立歴史民俗博物館の科研基礎B「村落社会の相互扶助の動揺と民俗の維持継承-葬儀変化に見る地域差の存在とその意味-」2018年度中間報告の中で、津波一秋氏が「糸満市における火葬後の洗骨改葬-上米次腹・座久仁腹の場合-」という論文を提出している。筆者も、2015年の企画展の図録『琉球弧の葬墓制-風とサンゴの吊い-』の中で、「上米次腹門中のジョーアキー儀礼」と題して、本稿で再度取り上げる調査報告について簡潔に紹介した。この内容について、先述の津波氏の論考の注釈中に、幾つかご指摘をいただいたので、それについては後ほど筆者の見解を述べたいと思う。

また、津波氏の論考は、筆者が調査していない年の内容となっているので、本稿でも参考にした。

2 上米次腹門中について

糸満市字糸満では、父系血縁集団を「腹」あるいは「門中」と呼ばれる地人（ジーンチュ）の集団が40ある。上米次腹門中（ウィーグムチバラムンチュウ）は、その40集団のうちの「宇那志（ウナン）門中」「保才（フセー）門中」「玉城（タマグスク）門中」「座久仁（ザグジン）門中」という4つの門中で構成され、一つの墓を共同で使用している集団の総称である。

門中の構成について『糸満市史 資料編13 村落資料-旧糸満町編-』では、上米次腹を構成する4門中は、「1世昔南山城主の孫である真栄里の越地大屋子」の「5世孫が糸満村に移り、与那之下（ユナンヒチャ）の娘を嫁にして<宇那志>を創設した。」とあり、祖先がきょうだい関係にあると伝えている[糸満市史編集委員会2016：60-64]。長男は宇那志、次男が保才、三男が玉城、四男が加那座（カナザ）、五男が安辺屋（アブヤ）、六男が豆腐屋（トーフヤー）、七男は高ン根（タカンニー）、長女が座久仁（ザグジン）に嫁いだことになっている。このうち、加那座は上米次腹では重要な位置を占める旧家とされ、祭祀行事は独自に行っている。しかし、世帯数が少ないため、組織運営上は宇那志門中の一員

として活動している。安辺屋と高ン根も、宇那志門中に加えられているが、独自の祭祀行事は行っていない。

宇那志門中や保才門中の根元は、高嶺間切真栄里村である。玉城門中は、宇那志の始祖の三男が分家して創設したもので、根元は真栄里村国富となっている。昭和9年の「糸満町腹別調」によると、ウナンシ腹、保才腹、玉城腹の元所は高嶺村字真栄里屋号上グムチで、座久ジン腹は、字真栄里の屋号ザグジンにある。宇那志、保才、玉城が男系の血筋であるのに対し、座久仁は、妹の嫁ぎ先であるといわれ、糸満にある元の座久や真栄里の集落内の元の神屋を拝んでいるという。

3 調査の概要

上米次腹門中のジョーアキーは、毎年旧暦の9月20日に実施されている。2014（平成26）年のその日は新暦10月13日であった。前日、台風19号が沖縄本島付近を通過したため、早朝から風が強く、天候の影響が心配されたが、この日にジョーアキーを行うことが重要であるとのことで、テントの配置を若干変更して例年どおり行事は執り行われた。

筆者は、当日の準備から片付けまで行事全体を見学し、おもに宇那志門中の宮城英雄氏より、その中で行われる儀礼についての説明をいただいた。また、当日参加されていた遺族に許可を取り、移葬の一連の流れを映像で記録した。この映像は、のちに企画展で上映するために編集し、「洗骨」儀礼のコーナーで紹介し、多くの方々に視聴していただいた。

先述の通り、2015（平成27）年には、関係者数名で墓室内部の調査を実施し、室内の測量や観察した結果をもとに簡易図面を作成。2019（令和元）年10月18日にはジョーアキー儀礼の追加調査を行った。

4 上米次腹門中の墓について

(1) 墓の場所

上米次腹門中が現在使っている墓は、糸満市字糸満与那堀1827番地にあるシルヒラシ墓4基と糸満市字真栄里あみや原1388番地にあるトーシー墓1基である。シルヒラシ墓とは、第一次葬に使用される墓で、トーシー墓は第二次葬に使用されている。

糸満の他の門中墓では、シルヒラシ墓とトーシー墓は大体が同じ敷地内にあるが、上米次腹門中の場合、2つの墓の距離は、直線にして約1キロ離れている。

シルヒラシ墓がある場所は、元々上地腹門中のアジシー墓⁴があったとされる土地で、上米次腹門中が譲り受けたという。地番(ジーチバン)はアマメーラーという説があり、敷地内にアマーラーの標識と香炉が置かれている。現在は市街地の中にあり、周辺には公共施設や住宅が建ち、土地の裏側に上地腹門中の元トーシー墓がある。

一方、トーシー墓がある糸満市字真栄里の一带は、石灰岩の岩がせり出した場所にある。墓の隣にアマーガーと呼ばれる豊富な水の湧き出る湧水池があり、「アマートーシー」と呼んでいる。正面には整地された平地が広がり、現在では宅地開発が進み、一带に住宅が次々と建設されているが、元々はヘンカタ(南潟)という干潟であった。現在のトーシー墓は、岩山の下段にあり、その上方には、かつて使用されていたという墓が残っている。

(2) 墓の変遷

上米次腹門中の祖先は、高嶺間切真栄里村から糸満村に移り住んだといわれている。そのため、現在でも真栄里の屋号上グムチの拝所を拝んでいる。

現在の墓より前の墓については、現在の場所から東へ300メートルほど離れたフーンサキ(帆の先)[写真1]と呼ばれる場所に岩を掘り込んだフィンチャーが2基並んであり、宇那志門中と玉城門中がムトゥトーシーとして拝んでいる。それ以前は、真栄里の鬱蒼とした茂みの場所を墓所にしていたそうである。

フーンサキトーシーの後、現在のトーシーの前は現トーシーの上部にあるアジシー墓を各門中が使っていたようである。この周りには5つの墓口が見られ、一番上の右側とトーシーのすぐ上の元トーシー



写真1. フーンサキトーシー



写真2. 一番上のアジシー墓

を宇那志門中が拝む。玉城門中は、すぐ上の左側にあるアジシーをヒジャイトーシーと呼んで拝んでいる。保才門中は、一番上の右から3番目を座久仁門中は、トーシー上の4つをすべて拝んでいるという。『糸満市史 資料編13』には、他にも各門中が拝む墓の詳細が記載されている[糸満市史編集委員会2016:203-204]。

現在使用している墓がいつ頃できたかについては、年代はわかっていない。ただし、墓の右側にある1969年(昭和44年)10月31日に建立された墓碑には、「いつ頃建設されたか詳らかではないが、およそ一六九〇年ころにできたものと推定される」と記されている。また、その後方に建てられている墓碑[写真3]には、咸豊五年(1855年)9月16日付で「真栄里村の南54坪、北38坪9分5厘の山野を上米次腹中の墓の敷地として永久に譲り受けたことは間違いないので、その証拠として碑文に記すものである。」とある。すなわち、1855年には真栄里村から墓地としての土地を譲渡されているので、現在のトーシー墓はその頃できたのかもしれない。



写真3. トーシー上の墓碑



写真4. シルヒラシ墓の墓碑

一方、シルヒラシ墓には、1969年(昭和44年)のコーブン⁵のときに設置された墓碑[写真4]があり、その中に、「1870年に設置されたもの」と刻まれている。この1870(明治3)年に築造されたのは3基だけで、ミーチャー墓と呼ばれ。その後、1935(昭和10)年代前半にもう1基増設されている。

(3) 墓の構造

①シルヒラシ墓

上米次腹門中のシルヒラシ墓[写真5]は、その敷地内に連結した4基の墓をメインに、納骨堂と呼ばれる建物及び倉庫、駐車場等からなる。シルヒラシ墓は通称「ユーチャー墓」(四つの墓)といい、先述

の通り、4基のうち左から3基は1870（明治3）年に築造され、向かって右の1基については1935（昭和10）年代前半に築造されている。外見上も、右端の墓だけ少し高くなっている。現在の墓の外装は、4つの墓の屋根をつなげて正面上の庇を曲線にし、破風のような形状をしている。元々は庇はなかったが、1984（昭和59）年のコーブンのときに取り付けたそうである。



写真5.シルヒラシ墓（ユーチー墓）

2015（平成27）年の調査では、墓室に入り、墓の構造や簡易測量等を行った[図面1]。

まず、墓の内部構造は、左端は大部分が岩板を掘り込み、その上に一枚板の石で天井や壁面を形造っている。床面も掘り込みで、棒状の敷居が6本見られ、その間にサンゴ礫が敷き詰められている。ここには、皿やフチュクルビンが落ちていた。

左から2番目は、岩板は半分くらいでその上に石を積んでいる[写真6]。天板は2枚合わせで、入口側は一枚板であった。左から3番目は、岩板は3分の1くらいで右に行くにつれて斜めになっており、



写真6.シルヒラシ墓 向かって左から2番目の墓室奥

石を積んでいる。天板は2枚の石を組んでいる。入口側は墓口の上部だけ石を積んでおり、古い漆喰の痕や瓦片なども確認できた。

右端の墓は、他の3つとは構造が異なり、完全に石積みである。天井部分は長方形の板石を組んだアーチ工法で、壁面も石を積んで作られている。

4基の墓で共通するのは、コンクリート製の棚が設置され、骨壺が置けるようになっていることである[写真7]。棚を設けたのがいつかは不明だが、火葬になってからだと思われる。1970年代前半まで風葬していたとのことで、元々木棺を5～6個置けるように支える石があったそうである。現在は各段に番号が振られて、そこに骨壺を置いている。

②トーシー墓



写真7.シルヒラシ墓 向かって右端の墓室内

トーシー墓[写真8]は、岩を彫り込んだフィンチャーで正面に破風型の屋根が設置されている。

トーシー墓の内部はイキと呼ばれる最終納骨地になっており、中央に左右を分ける通路が設けられている[写真9, 図面2]。上米次腹門中の4つの門中のうち、兄弟である宇那志、保才、玉城は、右側のイキに納骨し、シジの異なる座久仁は、左側に納骨することになっている。

墓の内部は、元々の洞窟を掘り込んだ形跡がある。中央奥の天井部分には穴を塞いだ痕跡があり、前面部分は泡石の石板を積んでいることが認められた[写真10]。恐らく前面部分を改修したときに、入口の部分を少し前に伸ばすため、岩板に泡石を積んだのではないと思われる。イキの前の部分も岩盤を掘り込んで作られおり、30cm程度の厚みの石で袖とイキに上る段が構えられている。

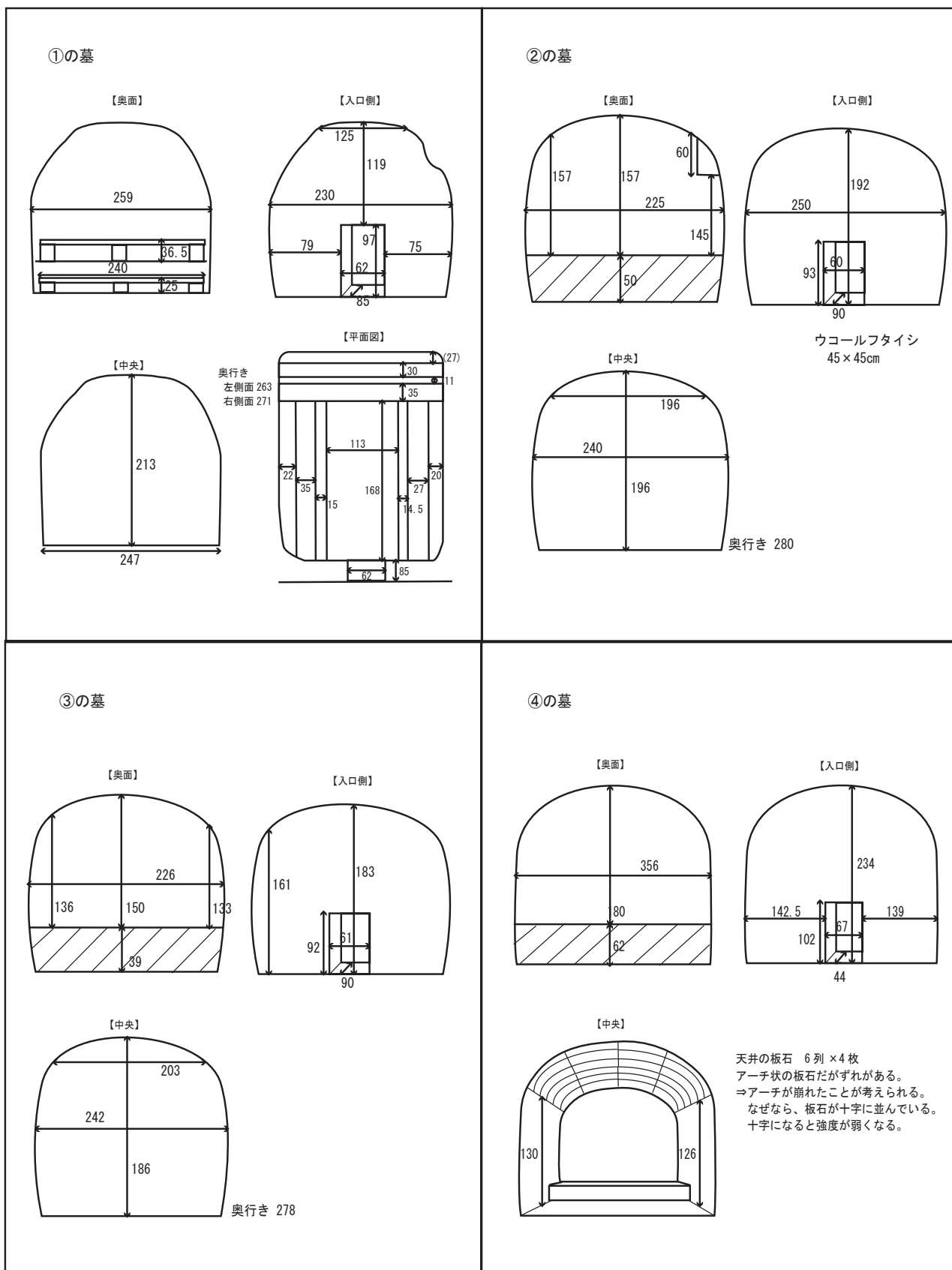


図1. 上米次腹門中のシルヒラシ墓（ユーチー墓）の簡易図

(単位：cm)

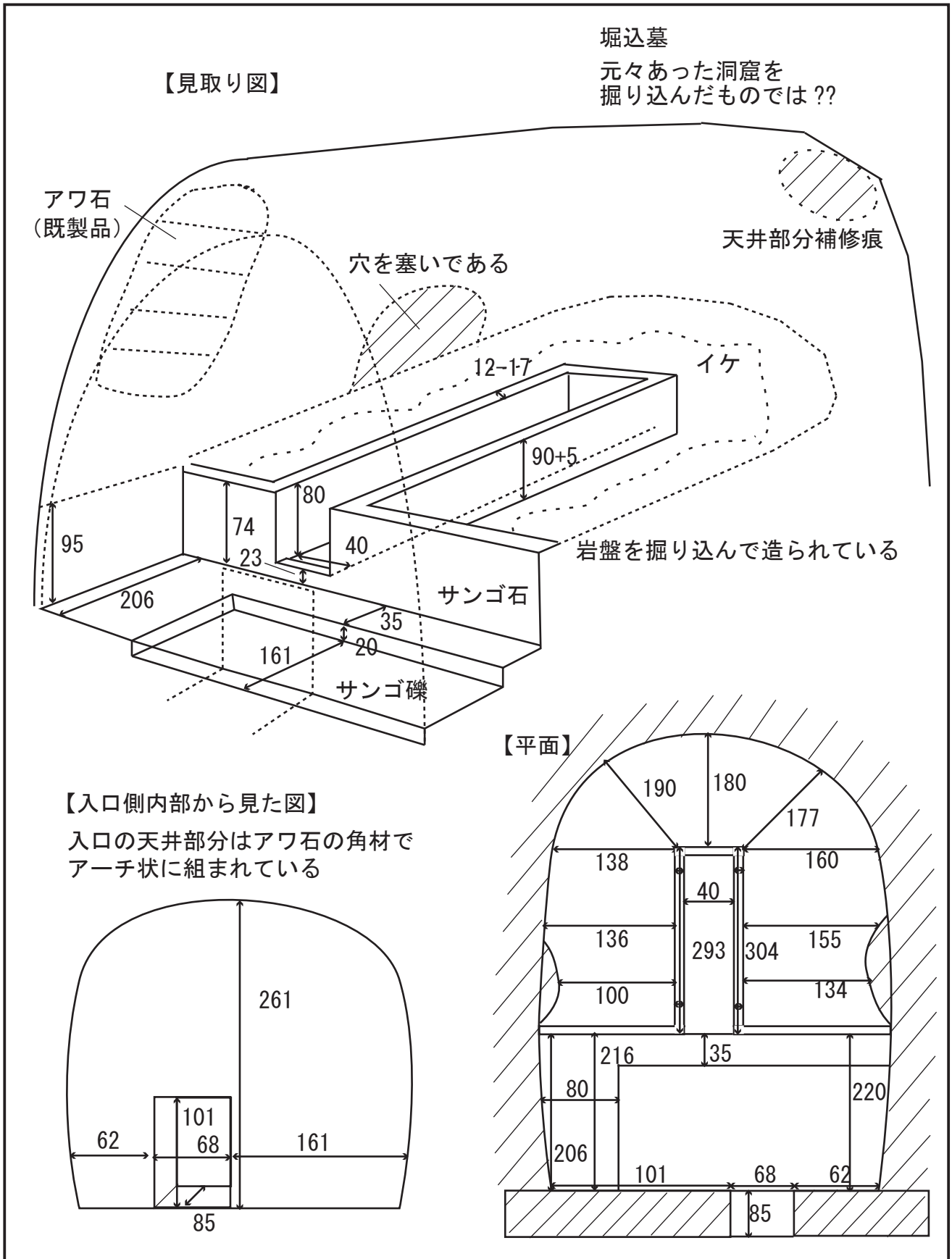


図2. 上米次腹門中のトーチー墓の簡易図

(単位: cm)



写真8.トーシー墓



写真9.トーシー墓の墓室内部



写真10.トーシー墓の入口側の石積み

トーシー墓がいつから使われているかは不明であるが、墓碑からすると1850年代後半からは使用していたかもしれない。それからの堆積物か、イキの中は遺骨でかなり満杯の状態になっていたとのことで、2013（平成25）年の13年忌コーブンで骨上げをして整理したそうである。

昔は風葬なので洗骨後の骨は原型を留めており、その中でも頭蓋骨は大切に扱われた。火葬に変わった現代においても、頭蓋骨は重視され、トーシー墓でイキに移す際も最後にのせる。このイキの正面奥には風葬時代の頭骸骨が多数並んで置かれている。

(4) 墓を共有する人々の範囲

先般から述べるように、上米次腹門中の墓は4つの門中が共同で使用している。これら4つの門中の全構成員は3,000人余りで、このうち最も大きいのが玉城門中で1,500人、続いて宇那志門中が750人、保才450人、座久仁が300人である。この人口比をもって、ジョーアキーの費用分担等の割合を決めている。また毎年世話役になる門中⁶を決め、その年の世話役は全体のジョーアキーの仕切りを、準備や片付けは、各門中に役割が割り当てられる。ちなみに世話役は、4門中が輪番で行っている。

各門中は、それぞれの血縁関係者を熟知しており、出産、結婚、転出、死亡等で名簿を整備する。門中の成員は、家ごと個人ごとに会費の割り当てや門中の行事への参加等が義務付けられている。

毎年、年末に次年度のペークーと呼ばれるその年の代表者を決め、一年の清算をし、次年度に向けての話し合いを持つ。この中で4つの門中が一緒に行うジョーアキーの行事は、すべて共同で行うということである。

5 上米次腹門中のジョーアキー

この行事は、その1週間程前に行われるメズリー（前揃）と呼ばれる打合せから始まる。メズリーには、その年の世話役である門中の代表者を中心に4つの門中の役員らが参加する。まず、ジョーアキーに関する作業手順を記した資料が配られ、各門中の役割分担や前日までの準備、当日の作業内容等を確認する。この中で、拝みや洗骨の仕方など前年反省等を踏まえて話し合われるそうである。

また、各門中では、ジョーアキーの2週間程前に、移葬を要する該当世帯に通知を送っている。糸満のラジオ放送でも、ジョーアキーの広報を流して周知している。

いよいよジョーアキー当日。ここでは、2014（平成26）年10月13日のジョーアキーの記録を中心に

儀礼の詳細について報告したい。

午前7時30分、トシー墓集合。メズリーでは7時30分集合の予定であったが、この日は前日の台風19号の片づけのため、墓掃除を7時頃から行っていたようで、筆者がトシー墓に到着したときには、既に掃除が終わりかけていた。

7時40分、トシー墓の墓口を開けるための儀式が始まる。4門中のペークーが、墓の前にビンシーを並べる。ビンシーを置く位置は、右から宇那志、保才、玉城、座久仁の順である。

つぎに、各門中とも12本の線香3組に火をつけてウコール（香炉）に並べる。そして、その場にいる全員で手を合わせる[写真11]。今年の干支を述べ上米次腹門中のジョーアキーを行うと報告し、ウコールの線香にビンシーのお酒をかける。

左右の隅（御三昧台）に12本線香を置き、土地番（ジーチバン）にカムイ門中（その年の世話役）が「墓を開ける」挨拶の御願をする。



写真11.トシー墓を開ける前の儀礼

墓口の前にある香炉を右へずらし、墓の錠を開ける。墓口を固めていた漆喰を除き、墓石をバールで持ち上げる。すると墓石は、斜めに傾けてはめ込まれていた形からまっすぐに立ち上がり、きれいに倒れるようになっていた。こうして墓口が開き、墓室内に電灯を、墓庭にテントを設置するなどして、トシー墓での準備が整った⁷。

一方、筆者らは8時頃にシルヒラシ墓に到着。テント張りの作業が始まっていたが、この年は台風の余波で風が強かったので、ギレーバと呼ばれる洗骨儀礼等で使われるテントは、例年とは異なりシルヒラシ墓の前面に設置された。

ほどなく、シルヒラシ墓を開けるための儀式が始まった。ここでは、トシー墓とは逆に左から宇那志、保才、玉城、座久仁の順にビンシーを並べた。ビンシーの前に小さな石を置き、その上に各門中ともに12本線香3組に火をつけて置き、全員で手を合わせる。そして、その年の干支を述べて上米次腹門中のジョーアキーを行うことを報告し、線香にビンシーの酒をかける。

つぎに、アーメラーと呼ばれる拝所へ移動し、各門中12本ずつ線香に火をつけて香炉の上に置き、土地番（ジーチバン）に「墓を開ける」挨拶をする。アーメラーについては、土地の名称であるとか土地腹門中を指すなど諸説あり、実際の意味は不明である。

以上の御願を終えると、いよいよシルヒラシ墓の墓口をノックして扉を開ける。ウコールを横にずらし、メジクがある場合もそれらを横に移動する。墓口の扉は、以前は石製であったが、現在は鉄製で鍵式の片開きドアになっている。扉は向かって左の墓から順に開けられ、4基が開いた後で敷地の一番奥にある納骨堂（子供墓、旅先で亡くなられた方の安置所）の扉を開ける。このほか、受付用のテント等が設置されて準備完了。

8時56分、通知を受けた初めの参列者が到着。受付において遺族は持参した「ユーチー墓の納骨届」を提出し、「上米次腹トシー墓納骨届出書」に必要事項を記入すると、各門中の係員が遺骨のが安置されている墓に誘導する。

この日初めの納骨者は、名古屋からの遺族であった。遺骨は納骨堂に安置されていたので、そこから骨箱ごとギレーバ⁸へ運ぶ。移動中は遺骨に陽が当たらないよう黒い傘を翳して抱きかかえて運び、テントではテーブルに慎重に置いた。

初めに酒で手を清め、骨壺を開け、頭骨の欠片を一つずつ取り出して白い紙にのせる。つぎに、その他の骨を別の大きい紙にこぼす。さらに、この納骨者は、別置していたのど仏を最後に添えた。のど仏を尊ぶ信仰は沖縄にはないので、係員は本土の慣習か仏教の影響ではないかと話していた。

つぎに、洗骨儀礼が行われる。これについては、次例で詳しく述べる。洗骨が終わると頭骨以外の骨を紙で包み、その上に頭骨だけをのせた紙を包んで

一緒にのせ、さらに白い布でくるむ。これを抱きかかえてテントから移動。遺骨には黒い傘を差し、車でトーチー墓へ向けて出発した。

一方、遺骨を取り出した後の骨壺は布袋に入れてテント脇に運ばれ、遺族の一人がハンマーでたたいて割り、木箱も同様にハンマーで割った。後から係の人が細かく割り、燃えないゴミとして処理することであった。

9時56分、ある遺族に記録撮影を申し込み、撮影の許可をいただく。玉城門中の方で、ナカモチと呼ばれる御願ができる方が一緒にいらっしゃるので取材を申し込んだ。

この納骨者一行は、母君の遺骨の移葬のため参列。親族が揃うのを待って受付された。

遺骨は左から2番目のシルヒラシ墓に安置されていた。初めにピンシーを墓口に置き、線香に火をつけて香炉に置き、ナカモチが御願する。つぎに、身内の代表者が墓室に入り、骨箱を取り出す。このとき、骨壺を探すまでに少し時間がかかったが、それは前年の墓のコーブンで墓室内の棚板を増設したため場所が変わっていたからだという。

代表者は骨壺を抱きかかえながら墓の外へ出る。墓口から出るときは必ずお尻から先に出るよう指導され、外で待っていたナカモチがサンで背中を払い浄める。墓口で頭から出たら魂が乗り移ると信じられている。代表者は、骨壺を抱きかかえ、寄り添うように別の人が黒い傘を差し、ギレーバへ向かった。

ギレーバでは、まず代表者が酒で手を清め、骨壺から頭骨を取り出し白い紙にのせ、つぎにそれ以外の部分を取り出し別の紙にのせる。このとき骨壺から指輪が出てきたので遺族に返却した。

代表者は手に酒を汲み入れてもらい、取り出した遺骨の上に3回振りかけた[写真12]。これが洗骨の名残の儀礼で、骨を浄める意味があるという。

頭骨とそれ以外の骨を分けて白い紙で包み、頭骨の包みを上にして布で包む。これを抱きかかえてトーチー墓へ。骨壺と木箱はテントの隣で割る。

トーチー墓では、シルヒラシ墓で手続きした書類を渡して順番を待つ。順番がくると、トーチー墓の係員に促されて墓の前に並ぶ。ナカモチがピンシーを墓口に置き、線香に火をつけウコールに供えて御



写真12.洗骨儀礼

願する。代表者も遺骨を抱いたままナカモチの横で手を合わせる。

玉城門中のペークーの案内で代表者が墓室へ入り、板の上に白い紙のまま遺骨を置き、まず体の部分をイキに納め、その後で頭骨を納める[写真13]。紙をたたんで持ちながら、お尻から外へ出る。ナカモチがサンで背中を叩いて払い浄める。



写真13.トーチー墓での納骨

こうして遺骨はトーチー墓に合祀され、納骨を終えた遺族は、水で手を洗い、酒で手を浄め、一連の儀礼は終了した。移葬に使った包み紙は前はそこで燃やしたそうだが、墓の向かいに住宅が建ったため現在は家庭用ゴミとして出している。

このような儀礼が、午前9時から午後3時まで絶え間なく行われ、納骨に訪れた遺族たちは死者との最後の別れの時を過ごしていた。

午後2時50分、片付けを始める。初めに、シルヒラシ墓で墓口を閉める。左側の墓から順に墓口の前で手を合わせ、墓の扉を閉める。香炉を元に戻し、そこにあったメーヅクも元通りに直す。右側までの

4つの扉を閉め終わったら、4門中のペークーは、朝同様左から宇那志、保才、玉城、座久仁の順にピンシーを並べる。12本線香3組に火をつけ全員で拝む。この後、シルヒラシのテントなどを片付けて終了。ペークー達はトーシー墓へ向かう。

午後3時30分、トーシー墓の墓口を閉じるための儀式が始まった。この年の儀式では、墓口を閉じる前に御願が行われたので、ここではその通りに記述する。

まず、4門中のペークーがそれぞれピンシーを置き、12本線香に火をつけてウコールに置き、全員で御願した。

つぎに、入口の墓石をペークーたちが起こして立て墓を閉じる[写真14]。墓口の間隙間にビニル袋を詰め、その上から漆喰で塗り固める。その手順は先輩から若いペークーに伝授された。

最後に、墓口に錠をかけ、香炉をその前に移動して完了。これで、ジョーアキーの一連の儀礼が終わった。



写真14.トーシー墓の入口の墓石を閉じる

終了後、門中の会計処理と慰労会を行う。この年は、約40名の遺骨がトーシー墓に移葬されたそうである。また、墓口を閉じる儀式について、後に手順が逆であったことが判明し、事後報告された。墓口を閉じた後御願するのが本来の手順であることが確認された。

おわりに

ジョーアキーという儀礼は、単に骨を移動するだけではない。それは風葬をしている時代に肉親の遺骸を取り上げ、骨を洗って浄め、門中の共同の納骨

場に納めるという慣習を受け継いだものである。したがって、この儀礼の中に組み込まれている動作の一つ一つに意味があり、それを今も大切に残している儀礼なのである。

このようにシルヒラシ墓からトーシー墓に遺骨を移す行為を「ウンチケー」と称している。この言葉について、筆者は先の企画展の図録で「ウンチケー（お迎え）」と記したところ、津波一秋氏の論文の注釈中で指摘を受けた[津波2018:52-53]⁹。筆者がこの言葉を「お迎え」と表した理由は、調査させていただいたナカモチの方にウンチケーのウグイを唱えるときの意味を聞いたところ、亡くなった方を「お迎えする」気持ちで唱えていると伺ったからである。

津波氏の指摘する「お連れする」という意味について宮城英雄氏に再度確認したところ、当事者から見た場合、ウンチケーとはまず死者を「お迎え」し、つぎに「お連れする」意味があるとのことであった。ウンチケーでのお迎えとは、死者ともう一度対面し、あの世へ旅立つ前に美しく整えてお渡しする意味が込められているようだ。ウンチケーの標準語訳として「お連れする」という表記が相応しいならば筆者もそれに倣うところだが、言葉の含みとして、お迎えしてお連れするという意味合いがあると解したい。

一方、上米次腹門中でのジョーアキー儀礼を観察し、記録を取っていく中で、各門中を支える世話役やペークーを指導する先輩方の姿が非常に印象に残っている。参列者を誘導し、トーシー墓に納骨するまでの間、各門中の係員は、先輩から伝授された儀礼の作法を遺族の方々に丁寧に教え、滞りなくウンチケーできるよう道案内をしている。

2019年の行事の中で、シルヒラシのギレーバで洗骨の指導にあっていた方に聞いた話によると、この方は世話係になってから5年ほどたつが、毎年先輩方のやり方を観察しながら勉強しているという。また、遺族の方々には亡くなられたご家族との最後の対面だから死者を敬いその死を悼む気持ちで洗骨に臨むよう声掛けしているとのことであった。

洗骨における作法では、酒を振りかけ方も手のひらに酒を溜めてゆっくり丁寧に振りかけ、最後に遺骸に手を当ててあげるように指導する[写真15]。そうした作法の中にも、骨を浄めて死者を弔うとい



写真15. 洗骨の作法を指導されているところ

う洗骨儀礼の重要性かつ神聖な場面であることが、はっきりと表れている。

火葬が普及するまでは、シルヒラシ墓の傍にあるイナンミガー（稲嶺井泉）から水を汲んで洗骨していたそうである。その慣行が火葬になり洗骨の必要がなくなった現代でも儀礼として残っている。そして、洗骨後は、死者は血縁で結ばれた集団の先祖とともに墓にうずめられ、永遠のときを刻むのである。こうして多くの先祖が眠る墓は、家族だけでなく門中全体で護っていくことになる。

このように、糸満市字糸満で行われているジョーアキーは、遺族にとっては死者と再び会える大切な法事であり、最後の別れを告げることができるともいえる。また、門中組織としては1年に1回、先祖代々の墓を開け、門中が一つになってこの行事を行うことで、先祖への気持ちを一にする役割も担っている。

昨今、各市町村では墓地再編のための計画が進められ、墓地の集約化や個人墓から合祀永代供養墓等の建設が増加している。そうした中であっても糸満では、門中という血筋を一にするという意識が働く集団の一員として合祀される慣習が将来にわたって普遍的に続くことであろう。一つの墓を多くの人が支えることで、死後も子孫たちが護ってくれるであろうという安心感がここにはある。そのような面で筆者は、糸満の墓と墓に関する慣習に共感し、未来への可能性を感じている。これからも未来永劫、「洗骨」儀礼をはじめとする死者や先祖を尊ぶ儀礼が受け継がれてほしいとの願いを込めて本稿を終えたいと思う。

謝辞

最後に、本稿を執筆するにあたり、上米次腹門中の関係者の皆様には多大なご協力いただき、心より感

謝の意を表したい。とくに、宮城英雄氏と宮城初枝氏には、ジョーアキー儀礼ひとつひとつの内容や意味をはじめ、墓室内での調査、資料の提供等で大変お世話になり、糸満市教育委員会の加島由美子氏をはじめ皆様にも、情報提供や調査への同行をお許しいただいた。ここに重ねて感謝申し上げたいと思う。

引用・参考資料

- ・沖縄県地域史協議会編『シンポジウム南島の墓-沖縄の葬制墓制-』1989, 沖縄出版
- ・金城善・宮城英雄「現世代における火葬骨の洗骨儀礼-映像に観る糸満からの報告-」2019沖縄民俗学会10月例会のレジュメ
- ・糸満市史編集委員会編『糸満市史 資料編13村落資料-旧糸満町編-』2016, 糸満市役所
- ・糸満市史編集委員会編『糸満市史 資料編12民俗資料』1991, 糸満市役所
- ・津波一秋「糸満市における仮想後の洗骨改葬-上米次腹・座久仁腹の場合-」『村落社会の相互扶助の動揺と民俗の維持継承-葬儀変化に見る地域差の存在とその意味-2018年度中間報告』2019, 国立歴史民俗博物館 関沢まゆみ研究室気付
- ・大湾ゆかり「上米次腹門中のジョーアキー儀礼」沖縄県立博物館・美術館編『平成27年度企画展琉球弧の葬制-風とサンゴの弔い-』2015, 沖縄県立博物館・美術館

注釈

- ¹ 元々は遺骸を棺箱に納めたまま洗骨改葬するまで安置しておく場所で、現在は納骨墓に入れるまでの一定期間仮安置しておくための墓をいう。
- ² 洗骨した遺骨を納める墓。当世墓、納骨墓、本墓。
- ³ 令和元年沖縄民俗学会10月例会「現世代における火葬骨の洗骨儀礼-映像に観る糸満からの報告-」での金城善・宮城英雄の報告より。
- ⁴ アジ墓又はアジシーのこと。各門中の当世墓に対し、遠い先祖を祀った墓とされる[田名1989]。
- ⁵ 糸満では、墓の年忌祭をコーブン（香盆）と称し、盛大に行われる。また、コーブンの年に墓の改修工事や墓碑の建設等も行うことが多い。
- ⁶ その年の世話役をカムイ門中と呼んでいる。
- ⁷ 墓口を開ける所作の記録は、2019年の調査によ

る。

⁸ 骨壺から骨を取り出し洗骨して移葬する準備をする場所。通常は納骨堂前にテントを設けるが、この年はシルヒラシの横に設置された。

⁹ 津波氏の指摘をまとめると、ウンチケーの標準語化について、辞書や同氏の調査内容によると「お連れする」「お供する」との意味になるという見解。